

Title	ウヰリアム・モリスの労働論 (二、完)
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.4 (1922. 4) ,p.525(93)- 537(105)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220401-0093

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1808, Du Pont edited Turgot's Oeuvres, he boldly reprinted his old text of the Ephémérides; this was copied by Daire in his edition of 1844." (Ashley, *ibid*, pp. ix-x)

吾人は Dupont du Nemours の編輯したる Oeuvres de Turgot を手にとりて能はず。雖も一七七四年五月三日 Turgot 及 Caillard 之興へし書簡に於て

“J'avais prié M. Dupont de le retrancher, mais il n'a pas voulu perdre trois pages d'impression”

及び Robineau 之

“Ce paragraphe parut, comme on voit, dans les Ephémérides, mais fut supprimé dans l'édition que Du Pont donna en 1808 des oeuvres complètes de son ami.” (Robineau, *ibid*, p. 120)

Journal des Economistes の Schelle の論稿を手にする。其能はざるを以て斷言するを得ず。又一七六六年の Réflexions と一七七六年の Réflexions との間に幾許の差異ありや、之れ亦不明の問題なり。洵に Ashley の言へるが如く今日に於て「Turgot の真正の字句に關して解答し能はざる幾多の不可解の疑問存するなり。」恐らく之れが眞の解決は Journal des Economistes 社と Guillaumin 社との關係を有する巴里在住の經濟學者のみ之を能くするものならん。

ウ井リアム・モリスの勞

働論 (二、完)

加 田 哲 一

四

人間の活動時と休息時とに希望と快樂を興ふ

節より成りしもの、一八〇八年の Oeuvres de Turgot 並びに Daire の編纂に係る一八四四年の Oeuvres de Turgot に於ては共に Réponse à une objection なる節は削除せられ、Réflexions の全篇百節より成れることを知るなり。この故に Ashley 及 Dupont de Nemours 並びに Daire の編輯したる Oeuvres de Turgot 中の Réflexions が全然 Ephémérides のとむを直ちに移したるものなる後には明らかか何等の根據なき錯覺として Ashley 自身の言々のものが却て “Strangest of all” といふべきならん。

吾人が Réflexions の邦譯を企てるに當りて底本として座右に置けるものは、既述の如く Robineau の版並びに Ashley の英譯本なるが果して Robineau の版が Turgot の一七七六年に訂正せられたるもの “text exact” なるを否や

る勞働はすべて有用な勞働である。有用なる勞働たるには少くも勞働において希望がなければならぬ。即ち第一の希望は休息の希望である。勞働が如何に快樂であるとしても、すべての勞働にはある程度の苦痛が伴ふ。さうしてこの苦痛を醫し、且つ苦痛を胃して勞働を遂行せしめるものは休息の希望である。休息時において充分なる享樂を行ふ前提の下においてのみ勞働が激洩たることを得る。休息時は、苦痛を回復し、勞働の生産物によつて充分なる快樂を得る程度において長いものでなければならぬ。第二には生産物に對する希望が存在しなければならぬ。吾々の勞働は眞に自然の要求ではあるが、尙ほ且つ生産物が眞の生産たることを要する。吾々の生産するものは眞に吾々の要求するものでなければならぬ。もしかゝる種類の生産を吾々が行つてゐるとしたならば、吾々の能率は

甚だ大なるものがあるであらう。第三に勞働そのものにおける快樂である。ある勞働の執行にあいては吾々は自然的に快樂を感じるが、すべての勞働において然るのではない。故に有用な勞働たるには勞働そのものにおける快樂がなければならぬ。かくて有用な勞働とは、第一に休息時における快樂の希望があり、第二に生産物の消費の快樂があり、第三に日常の活動における快樂がある勞働である。この三種の條件に合致する勞働が即ち有用な勞働である。然からざるものは人生に對する負擔であり、無用の勞働である。 ("Useful Work versus Useless Toil" in Signs of Change. Collected Works. Vol. 23. pp. 99-100)

而してかくの如き有用なる勞働は人間自然の要求である。モリス曰く「勞働そのものにおける快樂の希望と云ふことが、如何に不思議に讀

者の或者——否その大多数のものに考へられることであらう。けれども私は思ふ。すべての生物にとつては、その精力を費すのに快樂があり、さうして禽獸さへも、輕快、迅速、強健なることを喜ぶ。勞働してゐる人は……彼の肉體並にその心靈の精力を費してゐるのである。彼が勞働するときに、記憶と想像は彼を助ける。彼の思想許りでなく、過去の人物の思想が彼の手を指導する。さうして人類の一部分として彼は創造する。もしも吾々がかくの如く勞働すれば、吾々は眞に人たることを得るであらう。さうして吾々の生活は幸福で多忙となるであらう。」 (Collected Works. vol. 23. pp. 99-100)かやうな勞働は人間自然の要求である。故に吾々はその勞働に對して何等の刺激報酬を要さない。モリスの描いたユウトピアは實にこの種の勞働に充ちてゐる。ユウトピアの訪問者は、ユウトビ

アの賢人ハンモンドに問ふに、勞働の報酬なくして人を勞働せめ、彼をして勤勉ならしむることを得るかを以てした。
『ハンモンドは眞面目に云つた。「勞働の報酬がない。勞働の報酬は生命である。それで充分ではありませんか。」
然し、特別に良い仕事に對しても報酬がないのですか」と私は云つた。

「澤山の報酬があります」と彼が云つた。「それは創造の報酬です。……もし貴君が仕事の優秀と云ふことである創造の快樂に對して報酬の支拂をするなら、子供を生むことに對しても報酬請求書を出さなければなりませんまい。」
「然し」と私は云つた。「第十九世紀の人に云はせると子供を生むことに對しては人間が自然的の欲望を持つてゐますが、人間は働きたくないと云ふ自然的な欲望も持つてゐるので

す。」
彼は云つた。「私は昔の愚論を知つてゐます。それは全然眞實ではなく、また吾々にとつては無意味です。皆んなの人々から笑はれたフリエーはそのことをよく理解してゐました。」
「どうしてあなたには、それが無意味なのですか。」と私は云つた。
「何せと云つて、それはすべての勞働が苦痛だと云ふことを意味するのだ。吾々の考へは、君も知つてゐるやうに、それと大分違つてゐる。吾々は今富に不足してゐないので。吾々の恐れるところは何時かは仕事に不足しないだらうかと云ふことです。吾々が失ふことを恐れてゐるのは快樂であつて、苦痛ではないのです。」

「さうですか」と私が云つた。「私はそれに氣が付いておりました。私はそれについて貴下の

御意見を伺ふと思つてゐるところです。あな
たはどうして勞働の快樂をさう強く斷言する
ことが出来ますか。」

「すべての勞働は快樂です。それは仕事をする
ときに名譽と富とを得る希望があるからで
す。さうしてこのことが實際の仕事が快樂で
ない場合にも、愉快な氣持を起させます。ま
た貴君の所謂機械的な仕事の場合には、それ
は愉快的な習慣となつてゐるのです。それから
吾々の多くの勞働には勞働そのものが意識的
に感覺的快樂を與へるからです。即ちそれは
藝術家の勞働です。」(“News from Nowhere”
in Collected Works, vol. 16, pp. 91-92)

ヴェリアム・モリスは勞働の本質をかく解し、
さうしてその理想社會においてこの種の勞働の
實現することを以てその理想としたのであつ
た。謂ふところの意は工匠の精神の實現であ

る。彼曰く「工匠の根本精神は生産物それ自體
を求め、彼の勞働の生産物として、これを使用
することにある。第二義的の用途である市場の
需要は彼に對して何の意味もない。彼の製作し
た貨物が奴隸に使はれやうと王様に使用されや
うと、それは彼の關はるところではない。彼の
仕事は出来るだけ優良なものを作ることにあ
る。」(“The Socialist Ideal in Art,” Collected
Works, vol. 23, p. 261) モリスは飽迄も勞働至
上主義の人であつたのである。

五

モリスの勞働における理想から、現在の經濟
組織下における勞働を観察すると、それは甚だ
理想的のものではない。そは何故に然るか。そ
の救済策如何。このことを説明するためには、
モリスの中世紀觀並に現代文明批評の全般を知
る必要があるが、私はこれを他日の機會に譲り、

單に勞働に就いてのみ述べやうと思ふ。

モリスは現代社會の勞働分配の不平等なるこ
とを指摘する。モリスは勞働の上から見て現在
の階級を三つに分つ。その第一は、全然勞働を
しない貴族階級、第二は可成の程度において勞
働する中産階級、第三は全然勞働のみに従事す
る勞働階級である。この勞働分配の不平等とそ
の結果である勞働階級の過重な負擔は、勞働階
級の休息の希望を奪つて、彼等をして禽獸にも
等しい生活を爲さしめるに至るのである。けれ
どもこれのみが有用なる勞働を化して、無用な
る勞働と化する全部の原因ではない。全然勞働
から遠かつてゐる貴族階級は單なる全社會に對
する寄生蟲に過ぎないが、彼等の數は極めて少
數である。次には商業、製造業並に自由職業等
に従事してゐる中産階級がある。中産階級は一
見勞働してゐるが如くである。けれども彼等は

勞働はするが、生産はしない。例へまた生産す
るにしても、商業の場合のやうに甚だ浪費的で
ある。然るに彼等の消費量は、その勞働量に比
較して、著しく大である。さうして彼等の目的
は一樣に「効用の生産ではなくして、彼等自身
またはその子弟のために、全然勞働しないでも
いいやうな地位を得ることである。彼等の一生
の野望は、彼等自身のためではないにしても、
少くともその子弟のために、明かに社會の負
擔たるべき誇るべき地位を得ることである。」
(Collected Works, vol. 23, p. 102) 然も少數の

科學者藝術家等があつて、勞働のための勞働を
主張するものがあるが、それは極めて少數に過ぎ
ない。第三に來るべきものは、人口の大多數を
占める勞働者階級である。この階級はすべての
ものを生産し、他の二階級を維持して行くが、
尙ほ劣等な地位にゐる。彼等は心身共に劣等な

地位にあるのである。それは、資本家的經濟組織による必然的結果であると共に、彼等の多數が、生産者でないことに歸因する。彼等の多數は或ひは陸海軍の軍人であるとか、商店員その他の雇人である。さうして眞の富の生産者ではない。また例へ生産者であつても、その富裕なる非生産的階級の存在の結果需要のある奢侈品その他の下らぬ物の製作に従事してゐる。モリスはこれらのものを富とは稱さないで、無駄だと云ふ。「富とは、自然が吾々に與へるもの、並びに理性的の人々が、彼の合理的の使用のために自然の賜から製作したものである。……即ち自由な、人間らしい、墮落してゐない民衆の快樂に資するすべてのもの、これが富である。」(Collected Works vol. 23. p. 103)然るに現代における多くの労働者は、かゝる意味における富を生産せずして、無用なる奢侈品等を製作する。

かくて彼等の労働生活は必然的に墮落するに至る。何となれば賃銀労働者は賃銀支拂者の命するまゝに生産することを強制せらるるからである。かくて多くの労働者は殆んど奴隷にも近い境遇にある。モリス曰く「現代の社會は、奴隷のやうな營養を採り、衣服を着、家に住み、娛樂をする大多數の奴隷を包含する。さうして彼等の日常の必要は、彼等をして奴隷的貨物を作らしめ、その使用は彼等の奴隷状態の永續である。」(Collected Works, vol. 23. p. 104)

これらの状態は何の結果であるか。それは特權階級の利潤のための生産が行はれるからである。現在の經濟制度の下においては、製造業者が生産的に用ゐられる労働力の使用についての獨占權を持つてゐる。故に製造業者は、資本を持つてゐないで、その労働力を他人に賣つてのみその生活を維持して行くことの出来る人々か

らその労働力を買取つて、これを利用する。この取引における製造業者の目的は彼の資本の増殖にある。この場合において製造業者が、労働力に對する正當な價格、即ち彼の労働の全生産物を彼に提供することがあれば、彼は、資本増殖の目的に失敗したのである。然るに彼は生産手段の獨占者であるので、彼は労働者を強制して彼に有利な取引を取り結ぶことが出来る。さうして製造業者の生産における目的は富ではなくして、利潤である。彼の得る富が眞實の富であるか否かは彼の問ふ所ではない。たゞその貨幣價値の増加があれば、それで足りるのである。かくして現代の労働は、かゝる商業主義のため低調卑俗の極に達したのである。(Collected Works, vol. 23. pp. 108-110. Monopoly. Or, How Labour is Robbed. vol. 23. pp. 238-254)

六

然らば如何にして墮落した現代の労働を救済すべきであるか。現代の經濟制度における害悪はこの制度の精隨である資本家的特權制度に存する。即ち少數なる特權階級の側における掠奪と浪費とが、多數者をして貧困ならしめてゐる、もしもこのことが社會の存在に必要な欠くべからざるものならば、問題は甚だ簡單である。然るに不十分なる實驗のみでも、労働者の共同經營が富の生産に適當なることを示してゐる。少數特權階級の必要は、特權のためならば兎に角、富の生産のためには必要のないことである。故に經濟制度改造の第一歩として、人としての義務を廻避し、さうして、彼等の拒絶した仕事を他人に負擔せしめる特權階級を排さなければならぬ。すべての人々は彼の能力に應じて働かなければならぬ。さうしてその消費するところを生産しなければならぬ。かくて條件の平

等を基礎として眞實の社會が建設されるのである。

何人も他人の利益のために犠牲に供せらるることのない眞實の社會にあつては、すべての人が労働し、さうしてすべての生産物が浪費のない場合には、彼の労働の適當なる部分を消費することが出来る。故に階級の特權による奪掠が廢止せられ、さうして各人がその労働の成果を得ることとなる。或る派の社會主義者は社會成員の労働の成果の充分なる獲得と、これに伴ふ充分なる閑暇とを得ればこれ以上の問題はないと云ふ。然るにモリスはこゝに止まつてゐなかつた。彼は人間の專制的強制がこれによつて廢止せらるゝことを認めた。けれどもモリスは自然の必要の強制に對する報償を要求する。吾々の要求するところは吾々の快樂を減ずることなくして吾々の富を増加することである。自然は

吾々の労働が吾々の生活の快樂の一部となるまでは、遂に征服せられないであらう。(Collected Works, vol. 23. Pp. 105-107)

これを再言するとモリスの主張するところは、社會革命後に、すべてのものは協同的に労働し、何等の掠奪のない場合に、さうして、吾々の必要でないものを作る必要のなくなつた場合に、第一に着手すべきことは、その豊富な富と自由とを利用して、最も普通の、最も必要な労働をも、すべての人に對して快樂ならしめることである。(p. 108) 然らば如何にして労働を快樂ならしめるか。モリスはその條件を要約して六つとしてゐる。(一)生活の心勞を除くこと。(二)労働の強度に比例して労働時間を短縮すること。(三)労働の性質が單調なる場合には、仕事の種類を多くすること。(四)適當なる機械の使用。(五)各人の能力と性質とに適應する仕事

を各人に選擇せしめる機會を與へること、(五)裝飾を加へることによつて労働を愉快ならしめることがこれである。(Morris and Belfort Bax, Socialism, its Growth and Outcome. Kerr ed. p. 230)

さうして労働を快樂ならしめる前提として現在の制度の改造を必要とすることは既に説くところがあつた。この現在の制度の改造は土地、機械、工場等を包含する資本を社會有として、それを萬人の利益のために使用することに依つて利潤のための労働を廢止し、労働の成果を豊饒ならしめるにある。この前提の成熟された後においてのみ労働の享樂化を論ずることが可能なるに至るのである。(Collected Works, vol. 23. p. 110) 労働の享樂化のもう一つの前提としては労働それ自身が有意義のもの、有用なるものでなければならぬことである。即ちそが人と

しての義務を遂行し、社會的徳行的要求に合致するものでなければならぬ。この二つの前提があつて始めて、前記の六つの労働享樂化の條件を云々することが出来るに至るのである。先づ労働時間の短縮である。これは多くを論ずる必要がない。もし浪費さるる労働がないとすれば、労働は短時間とすることが出来る。さうして現在苦痛な労働も短時間の間ならばこれに耐えることが出来るであらう。次に最も重要なのは仕事の變化である。人をして日々同一な仕事に従事せしめ、その變更、休止の希望を與へないのは、人を牢獄に入れて置くのと同一な苦痛を與へることである。專制的な利潤獲得者の外はかゝることを必要としない。モリスの説によると吾々は少くとも三つの職ジョブを習得し、これを実行することが出来る。人は力を要する仕事と共に力を要さない仕事に従事することを欲す

るであらう。さうして吾々人間にとつて最も必要な、最も愉快な仕事である土地の耕作に従事することを嫌ふ人は少ないであらう。この仕事の多様化について問題となるのは教育のことである。現在の教育はあまりに商業的競争の災禍を蒙つて居る。それは人々をして商業的組織の間にあつて地位を得るための便宜にのみ行はれるのに過ぎない。さうして手藝 Handicraft の如きは全然顧みらるることがない。この状態は甚だ望ましいものではない。故に來るべき新社會における教育は個性の發揚に適するやうな手藝を修得せしめることを要する。かくしてのみ各人の仕事を多様化することが出来るのである。仕事の多様化と云ふことにつき論すべきはまだ一つの問題がある。それは民衆藝術の問題である。民衆藝術は商業主義のために撲滅された。けれどもそれは人間が自然と闘争し始めてから、資本

的制度が起るまで存續してゐたのであつた。さうしてそれが存續してゐた間は、人間によつて製作されるあらゆるものに、恰度自然によつて製作されたすべてのものが自然によつて飾られるやうに、裝飾が施されてあつた。資本制度以前における工匠は彼の手によつて製作されるすべてのものに極めて自然に裝飾した。さうしてこの藝術の起源は勞働者がその仕事において變化を求める必要を感じたことにあつた。この仕事における變化とその結果による勞働の快樂こそ實に重大なる問題である。然かもその表現たる民衆藝術は現在の世界から消滅したのである。かくて勞働は、その快樂を奪はれて、一の負擔たるに至つたのである。

勞働の享樂化に關しては仕事の變化と勞働時間の短縮の外に、愉快なる環境を必要とする。現在の如き人口の稠密の都會と亂雑な工場とは

單に資本的制度の維持にのみ必要である。資本家的生産と資本家的交換と資本家的土地の貸與とは、資本の利益を増進するために都市に人口を集中せしめた。然るに眞の生産のためには必ずしも都市に人口の集中することを要さないのである。必ずしも工場的生産たるを要さない。すべての人々がその静かな田舎の家で、或ひは小工業的村落や小さい町でその職に従事してはならないと云ふ理由はない。また例へ工場的生産を必要とする場合においても、工場に對する諸科學の應用、仕事の變化の實行され得ない筈はない。たゞ資本的利潤の追究を主として産業を經營する場合においてのみかゝる施設を行ふを得ないのである。(Collected Works, vol. 23, pp. 112-116, 209-210)

次には機械の問題がある。近代における機械の發明は實に驚嘆に値する。さうして機械は「勞

働を省く」と稱せられた。けれども吾々の期待は裏切られたのであつた。機械の眞に成し遂げたことは熟練なる勞働者をして不熟練勞働者と同位に居らしめ、單に産業豫備軍の數を増加し、さうして勞働の者生活を不安にし、資本の増殖に援助を與へただけであつた。要するに近代人は彼等自身の發明した怪物のために奴隸とされたのであつた。けれどもモリスは藝術的精神の豊富な人に往々あるやうに機械を絶対に排斥するものではなかつた。モリスは「機械をして吾々の従僕たらしめず、吾々の主人たることを許したことが、現代の吾々の生活の美を傷けた」ことを承認して居る。 ("How We Live and How We Might Live," in Signs of Change, Collected Works, vol. 23, p. 24) さうして彼は彼の未來社會において一定の程度までの機械の使用を許すのである。即ち必要にして合理的な

労働で然かもその労働に享樂性のない機械的労働に對しては機械を使用して、労働の負擔の軽減を計るのである。何故に一定の程度までに機械の使用を限定することが出来るか。それは教育普及の結果何人も手藝に對する興味を覺え、かくて多くの仕事は手によつて行はれるに至るであらうからである。(Collected Works, vol. 23. pp. 20, 117. Art under Plutocracy. pp. 171-183)

かくの如き労働の享樂化は果して何等の犠牲なくして行はるるであらうか。モリスはこの問題をあまりに重大視してゐないかの如くである。モリスはある一定の犠牲の存することを認める。即ちもし現在の生産の如き程度で萬人の労働する未來の社會において生産が行はれるものと假定すれば、それは勿論生産高の増加となる。けれども労働の享樂化において吾々の拂ふ犠牲は生活向上のための犠牲があつて、吾々に

とつては少しの苦痛にもならない筈である。(Collected Works. Vol. 23. P. 116)

七

モリスの労働論はその藝術觀に立脚してゐる。彼はその社會主義的藝術觀を表明して云ふ。「故に藝術における社會主義者の理想の第一點は、それが全民衆の共同でなければならぬと云ふことである。このことは、藝術が一定の型態を有し、耐久的に作られたすべてのものの缺くべからざる一部分となることを認めらるることに依つて、達し得る。言葉を換へて云へば、藝術を以てある特權ある地位に對する附隨物として見ずして、社會主義者は、これを社會もその成員から奪ふ權利を持つてゐない人生の必要だと主張する。さうして彼はまた主張する。この要求が樹立されるためには、民衆が彼の最も適する仕事に従事するの機會を持たなければならぬ。單に人間の努力を無駄にしない許りでな

く、その努力は快樂を以て遂行されなければならぬ。私はこゝで自分か屢々云つてゐることを繰返さなければならぬが吾々の精力を愉快に用ゐると云ふことは、すべての藝術の源泉があると共にすべての幸福の原因である。即ちこれは人生の目的である。故にすべての社會の成員にその精力を愉快に用ゐる適當な機會を與へない社會は人生の目的を忘れたものであり、さうしてその職分を充たしてゐるものではない。故にそれは單なる專制であつて、すべての點から反對せらるべきものである」。(Socialist Ideal in Art. Collected Works, vol. 23. pp. 260-261)

かくの如き立場にあるモリスが労働の原則として、(一)その労働に爲すだけの價值があること、(二)労働それ自身が快樂なること、(三)斯くの如き條件の下において爲す労働が煩雜ならず人心を極度に勞さないことを要求し、さうして

彼の未來社會において(一)名譽あるさうして適當なる労働、(二)健全にして美しい住宅、(三)心身の休息のための充分なる閑暇を要求したことは極めて自然である。("Art and Socialism." in Lectures on Socialism. Collected Works, vol. 23. pp. 209-210.) さうしてモリスの理想的生活が(一)健全なる身體、(二)過去、現在及び未來に同情ある能動的の精神、(三)健全なる身體と活動的なる精神とに適する職業、(四)住みよい美しい世界を實現することにあるを知るならば、(How We Live and How We Might Live. Collected Works, vol. 23. p. 25)モリスの社會觀における彼の労働觀が如何に重要な地位を占めてゐるかを知ることが出来るであらう。(一九二二・三・一四稿了)